

ニュージーランドの高齢期に内在する生と死に対する態度 —わが国の高齢者の死生観との比較から—

杉原トヨ子¹⁾, 西地令子¹⁾, 古田豊子²⁾,
シルバ寿子³⁾, 道廣睦子¹⁾

¹⁾大阪青山大学健康科学部看護学科, ²⁾大阪青山大学健康科学部子ども教育学科,
³⁾大阪大学 非常勤講師

The views to life and death that be inherent among the elderly persons in New Zealand
—In comparison to the views life and death among the elderly persons in Japan—

Toyoko Sugihara¹⁾, Reiko Nishichi¹⁾, Toyoko Furuta²⁾,
Toshiko Silva³⁾, Mutsuko Michihiro¹⁾

¹⁾School of Nursing, Faculty of Health Science, Osaka Aoyama University

²⁾Department of Child Education, Faculty of Health Science, Osaka Aoyama University

³⁾Osaka University

要 旨

本調査は高齢者の死生観に基づくケア方向性について、ニュージーランドと日本との比較検討をすることで、福祉先進国の実態から将来的な展望を見出すことを調査研究の目的とした。質問項目は4つの「現状の生活に対する認識」「宗教的関わりに関する認識」「死に対する認識」「死後に対する認識」(以下「死生観等」)に分類して調査した。ニュージーランドと日本の高齢者における死生観等を比較した結果、「現状の生活に対する認識」および「死後に対する認識」に有意な差が認められた。一方、「宗教的関わりに関する認識」と「死に対する認識」には有意な差がなかった。これは、高齢者の死生観等は、各国の社会的背景の影響を受けながらも、個々の社会的地位や人生経験を通しての認識であることを示した。したがって、ケア専門職として彼らの死生観を把握し、個々への関心を持って一人ひとりの思いを傾聴することが必要であることが再認識された。

キーワード：高齢者、死生観、安寧な死

I. はじめに

2016年WHOの報告によれば、わが国の平均寿命は男性80.5歳世界6位、女性86.8歳世界1位の長寿国とされている¹⁾。しかしながら、わが国では近年、老々介護の負担による高齢者の心中事件や配偶

者による殺人事件等現状が報道され、長寿であることは必ずしも幸福であるとは言えない。一方、ニュージーランドは男性80.0歳で世界10位、女性に到っては83.3歳26位であると報告されている¹⁾。それでも、佐藤²⁾は「ニュージーランドは第2次大戦後、福祉国家の一つとして今日に至るまで、1938

年の北欧諸国の社会保障制度とその体系のもとで制度の充実・整備を図ってきたことは周知の事実である」と論述している。その他にも、高齢者の生活に関する人口や高齢化率、制度、経済的状況の両者は大きく異なっている³⁾(表1)。

したがって、本調査は、社会的背景、歴史的背景が異なるニュージーランドの高齢者を対象とし、質問紙による回答および面談によって死生観等を把握することを目的とした。また、わが国の高齢者における死生観との対比によって、安寧な死を迎えるために、高齢者自身が望む将来的ケアの示唆を得ることを研究の目的とした。さらに、超高齢化であるわが国の高齢者における施策の方略指針を見いだすことを目的とした。

II. 研究方法

1. 研究対象者および調査期間

ニュージーランドでは、ハット市内のリタイアアパートメントに居住(平成29年9月現在)している高齢者15名を対象とした。次に、日本の対象者として2016年5月～7月にショートステイ施設利用者9名、地域で自立生活している高齢者9名の計18名とした。調査対象者は2国共に意思疎通可能な高齢者を選定した。

ニュージーランドおよび日本における調査期間は、2017年5月から2017年9月末の期間に実施した。

2. データの収集方法

事前に調査主旨に同意を得て施設長が対象者に質問紙を配布し、文書および口頭で説明した。調査に参加した高齢者が、質問紙は自記式アンケート方式で、「死生観等」に関する17項目の質問に対して回答した。その後、対象者に研究者が可能な範囲で面談を実施した(表1)。同様に、日本の調査も事前に配布し研究者による面談を行った。

3. 質問内容

調査項目は、朝日新聞社が公表した「日本人の死生観」の調査結果を引用し、杉原の調査研究結果(未発表)から質問項目を4つの「現状の生活に対する認識」「宗教的関わりに関する認識」「死に対する認識」「死後に対する認識」(以下「死生観等」)に分類し、さらに、その中から主要な17項目を抽出し質問紙を作成した。

質問紙の結果および面談調査で得た結果を2国間で比較検討した。

4. 分析方法

両者の比の検定については、10未満の数値が多いため、フィッシャーの正確確率検定(以下「フィッシャー検定」)で検定を行った。すべてのデータは統計解析パッケージIBM SPSS Statistics 22.0を使用して分析した。統計的有意水準は0.05とした。

5. 倫理的配慮

倫理的配慮として、ニュージーランドでは、ハット市(人口102千人)の市長夫人に高齢者施設を選定して頂き、事前の承諾を得た。また、施設長あて研究目的、研究者の概要を記載した資料を送付し、事前に同意を得た15人が参加した。その対象者の質問紙回収時に、再度口頭で研究の主旨等を説明して質問紙の回収を行った。その後、調査参加および面談に同意した対象者に対し面談を実施した。日本でも、ハット市と同じ人口規模の防府市、周南市内の対象施設に事前に承諾を得て、同意した対象者に質問紙を配布し、その回収と面談を行った。

また、調査項目は、朝日新聞社が公表した「日本人の死生観」の調査結果を引用しているが、その使用については担当者に同意を得ている。

III. 結果

1. 対象者の属性

対象者の特性を表2に示す。ニュージーランドの対象者は、ハット市の集合住宅居住高齢者15名(男性3名、女性12名)年代別では80代が最も多かった。一方、日本の対象者では、男性の参加者が得られず、対象者18名すべてが女性で70代が最も多かった。両者の年代の比には有意な差が観察された($p<0.05$)。

2. 現状の生活に対する認識

対象者の現状の生活に対する認識について、ニュージーランドと日本別に表3に示す。「2.人生に対しての不安」について、ニュージーランドでは0名対し、日本人は13名(72.2%)と多く有意な差であった。一方、「2.今の生活に満足」と「3.運命の受け入れ」では、ニュージーランドでは14名(93.3%)が「はい」と回答し、それに比較して日本での割合は13名(72.2%)と少ない傾向を示したが、有意な差ではなかった。

3. 宗教に関する認識

対象者の宗教に関する認識について、ニュージ

表1 二国間の高齢者に関する社会的背景と制度

国名	ニュージーランド	日本
人口	127,749(千人)	4,661(千人)
高齢化率(2015)	15.2%	26.9%
社会福祉制度	社会福祉法	介護保険法・老人福祉法
医療保険	開業医(GP)療制度を基本に 一部改変(階級による負担) 13歳未満GP無料化 リバーズモゲージ導入	社会保険(原則定額負担) 低所得者、には負担軽減制度 乳幼児医療制度(医療費軽減)
年金制度方式	民間(プロバイダー)主導	行政主導
平均年金受給額	約12万円	約6万5000円
年金支給条件	居住実績等条件	加入期間等条件

引用文献: WHO¹⁾(2016), 佐藤進²⁾(1998), 芝田英明³⁾

表2 対象者の属性

	ニュージーランド		日本	
	(ハット市)		(防府市、周南市)	
	n	(%)	n	(%)
	n=15		n=18	
性別				
男性	3	(20.0%)	0	(0.0%)
女性	12	(80.0%)	18	(100.0%)
年齢(歳)				
60-69	0	(0.0%)	5	(27.8%)
70-79	2	(13.3%)	7	(38.9%)
80-89	8	(53.3%)	5	(27.8%)
90-99	5	(33.3%)	1	(5.6%)
独居	11	(73.3%)	4	(22.2%)
介護保険認定者	-		11	(61.1%)

表3 現状の生活に対する認識

項目	ニュージーランド			日本			p 値
	はい	いいえ	その他	はい	いいえ	その他	
	n(%)	n(%)	n(%)	n(%)	n(%)	n(%)	
1. あなたは今の生活の満足していますか	14(93.3)		1(6.7)	13(72.2)	4(22.2)	1(5.6)	ns
2. あなたはこれからの人生を考えた時不安を感じますか	1(6.7)	13(86.7)	1(6.7)	11(61.1)	6(33.3)	1(5.6)	**
3. あなたは現状を運命と受け止めますか	14(93.3)		1(6.7)	13(72.2)	4(22.2)	1(5.6)	ns

*p<.05 ns:有意差なし p 値は Fisscher 検定で算出

表4 宗教に関する認識

項目	ニュージーランド(n=18)			日本(n=15)			
	はい	いいえ	その他	はい	いいえ	その他	
	n(%)	n(%)	n(%)	n(%)	n(%)	n(%)	
4. 宗教はあなたが生きるために大切だと思いますか	5(33.3)	9(60.0)	1(6.7)	10(55.6)	7(38.9)	1(5.6)	*
5. あなたは宗教を信じることにより死の恐怖がなくなり、和らいだりすると思いますか	4(26.7)	8(53.3)	3(20.0)	10(55.6)	6(33.3)	2(11.1)	ns
6. 自分の葬儀は何らかの宗教に基づいた形式にして欲しいですか	6(40.0)	7(46.7)	2(13.3)	11(61.1)	6(33.3)	1(5.6)	ns
7. あなたは家族の葬儀や追悼行事について相談できる宗教家がありますか	10(66.7)	5(33.3)		10(55.6)	6(33.3)	2(11.1)	ns

*p<.05 ns:有意差なし p 値は Fisher 検定で算出

ランドと日本別に表4に示す。「4.宗教が生きるために必要である」の項目で、ニュージーランドでは、「はい」の回答が5名(33.3%)、「いいえ」9名(60.0%)であった。一方、日本では「はい」が10名(55.6%)、「いいえ」が7名(38.9%)であった。2国間の各回答の割合の差は有意であった。しかし、「5.宗教が恐怖を和らげる」ではニュージーランドは日本に比較して「はい」と回答する割合が少ない傾向であったが、有意な差ではなかった。また、「6.自分の葬儀の宗教的形式」「7.家族葬儀の相談できる宗教家の存在」の項目においても、2国間に有意な差は認められなかった。

4. 死に対する認識 (表4-1)

対象者の死に対する認識について、ニュージーランドと日本別に表5に示す。

「8.理想的な死の迎え方を考える」では、「はい」を回答する割合がニュージーランドでは9名(60.0%)、日本は2名(11.1%)と、2国間に有意な差が観察された。

一方、「10.死への恐怖」では、ニュージーランドの方が「いいえ」と回答した割合は高い傾向がみられたが有意な差ではなかった。これ以外の項目「9.死の迎え方を決めておく」、「11.孤独死への心配」については、2国間に有意な差がなかった。

対象者の「死のイメージ」について、ニュージーランドと日本別に表6に示す。(図1参照)。ニュージーランドの回答では「苦悩からの解放」が最多で、次いで「先にあった人との出会い」、「永遠の別れ」が同率であった。一方、日本では「先に逝った人との出会い」、「永遠の別れ」が同率で最多であった。しかし、ニュージーランドに比較して全体的に回答数が少なく、「苦悩からの解放」も含めどの回答も低率傾向を示した。

次に、あの世のイメージをニュージーランドと日本別に表7に示す(図2参照)。2国とも、「やすらぎ(平和)」が最多で、次いで「無」であった。日本の特徴として、ニュージーランドでは選択されていなかった「生まれ変わり」が選択されていた(図2参照)。

5. 死後等に対する認識

対象者の死後等に対する認識について、ニュージーランドと日本別に表8に示す。

「12.あの世の存在」については、ニュージーランドの「いいえ」と回答した割合は8名(53.3%)と多かった。これに対して、日本では「はい」と回答した割合が13名(72.2%)と多かった。2国間の回答の割合の差は有意であった。だが、「13.死後の霊魂の存在」は2国間に有意な差はなかった。

表5 死に対する態度

項目	ニュージーランド			日本			p 値
	はい	いいえ	その他	はい	いいえ	その他	
	n(%)	n(%)	n(%)	n(%)	n(%)	n(%)	
8. あなたは自分自身の理想的な死の迎え方を考える方ですか	9(60.0)	6(40.0)		2(11.1)	12(66.6)	4(22.2)	**
9. あなたは自分の死の迎え方を自分で決めておきたいですか	11(73.3)	5(26.7)		16(88.9)	2(11.1)		ns
10. あなたは死が怖いですか	1(6.7)	14(93.3)	2(13.3)	3(16.7)	12(66.7)	3(16.7)	ns
11. あなたは孤独死することを心配していますか	3(20.0)	10(66.7)		2(11.1)	15(88.9)		ns

**p<.01 ns:有意差なし p 値はFisher 検定で算出

表6 死のイメージ(複数回答)

	永遠の別れ	この世からの消滅	苦しみの解放	再出発	苦悩からの解放	バラ色の人生	先に逝った人との出会い	その他
ニュージーランド n=15	5 (33.3%)	2 (13.3%)	1 (6.7%)	2 (13.3%)	6 (40.0%)	2 (13.3%)	5 (33.3%)	5 (33.3%)
日本 n=18	3 (16.7%)	2 (11.1%)	1 (5.6%)	2 (11.1%)	1 (5.6%)	1 (5.6%)	4 (22.2%)	4 (22.2%)

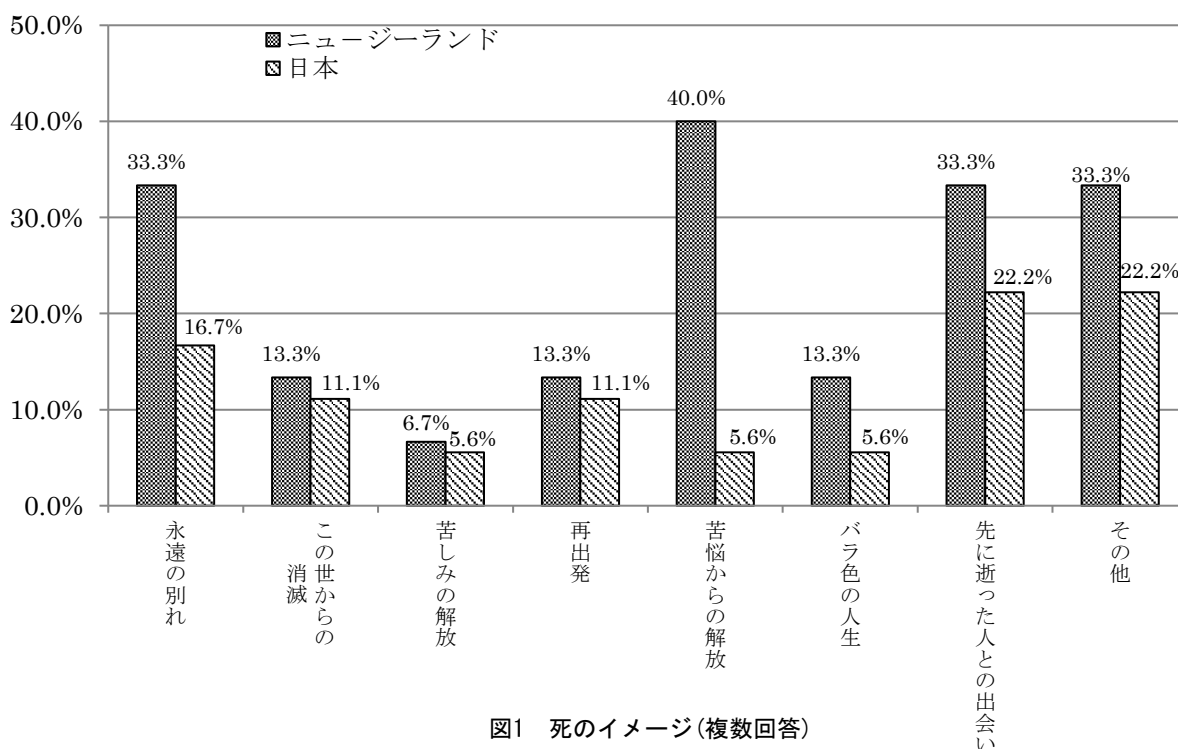


表7 あの世のイメージ

	永遠	無(nothing)	生まれ変わり	懺悔	やすらぎ(平和)	苦悩	その他
ニュージーランド	2 (13.3%)	5 (33.3%)	0 (0.0%)	1 (6.7%)	10 (66.7%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
日本	1 (5.6%)	7 (38.9%)	3 (16.7%)	0 (0.0%)	8 (44.4%)	0 (0.0%)	1 (5.6%)

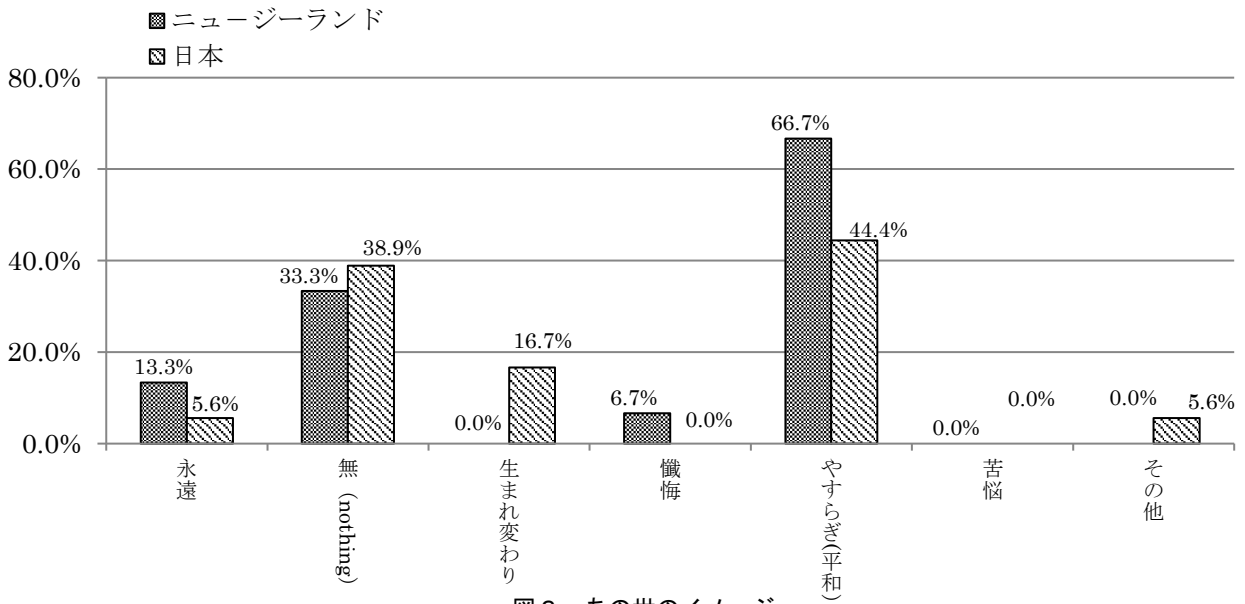


図2 あの世のイメージ

表8 死後に対する認識

項目	n(%)						p 値
	ニュージーランド			日本			
	はい	いいえ	その他	はい	いいえ	その他	
12. あなたはこの世とは違う死後の世界や「あの世」はあると思いますか	3(20.0)	8(53.3)	4(26.7)	13(72.2)	3(16.7)	2(11.1)	**
13. 人間は死んだ後、霊魂が残ると思いますか	9(60.0)	4(26.7)	2(13.3)	9(50.0)	7(38.9)	2(11.1)	ns
14. 自分の墓か先祖の墓に入ることを考えていますか	4(26.7)	9(60.0)	2(13.3)	13(88.9)	4(22.2)	1(5.6)	**
15. 両親や祖父母の墓を守るのは子供の義務だと思いますか	6(40.0)	8(53.3)	1(6.7)	11(61.1)	6(22.2)	1(5.6)	ns

**p<.01 ns:有意差なし p 値は Fisher 検定で算出

「14.先祖のお墓に入る」についても、「はい」と回答したニュージーランド割合は、日本に比較して有意に低かった。それでも、「15.親や祖父母のお墓を守るのは子供の義務」においては2国間に有意な差は認められなかった。

IV. 考察

本調査結果で、「現在の生活に対する満足感」および「運命の受け入れ」について、ニュージーランドでは9割以上の高齢者が肯定的な回答をし、現在の生活に対して満足し自分の運命を受け入れていることが示された。一方、わが国の同項目の回答では、7割であったが有意な差ではなかった。これらのことから、現状の生活に満足し、今の運命への受け入れに対しては2国間に差がないようとも考えられた。しかし、「今後の人生に対する不安」では、ニュージーランドの高齢者の肯定の割合は1割未満に対して、日本は約6割が不安であると回答しており、2国間に有意な差が認められた。この結果は、2国間の社会福祉制度体制の差が影響している可能性も否定はできない。しかし、ニュージーランドの対象者は、福祉サービスから除外されるような裕福な高齢者施設—リタイアアパートメントハウスの居住者であり経済的に恵まれていた。これに対して、わが国の対象者は一般的な高齢者から抽出され、経済状態も多様であった。つまり、2国間の不安の差は寧ろ経済的要因の方が大きいと推測される。実際、ニュージーランドでは経済レベルによってランク付けされ、受けられる福祉サービスが異なっている。一方、わが国は介護や医療保険による負担は経済格差に関係なく原則一律である。近年には経済格差への配慮、高額所得者への負担増、低所得者への負担軽減措置等も制度化されてはいるが、負担格差は改善されているとは言い難い。

興味深いことに、本調査結果ではニュージーランドの高齢者では、「宗教が生きるために必要」の項目に6割が否定的であった。また、「宗教が死の恐怖を和らげる」でも約5割は否定的であった。これに対して、日本は5割以上の高齢者が「宗教が生きるために必要である」、「宗教が死の恐怖を和らげる」共に肯定的であり、2国間に有意な差がみられた。さらに、死に対する態度では、ニュージーランドでは自身の理想的な死の迎え方を6割の高齢者が考えているに対して、日本は1割程度の高齢者が考えて

いるに過ぎず、2国間で有意な差が認められた。死への恐怖の項目では、ニュージーランドの高齢者は9割以上が否定的であったが、日本では7割未満しか恐怖がないという結果を得ており、その差は有意ではないものの日本の高齢者の方が死の恐怖を感じている可能性も否定できなかった。これは、先の日本人の方が「不安がある」という結果と関連があるのかもしれない。

「死のイメージ」では、ニュージーランドの高齢者は「苦悩からの解放」という死をやすらぎと捉えているイメージが最も多かった。これに対して日本は「先に逝った人との出会い」が最も多く、「苦悩からの解放」の選択は殆どなかった。同様に、あの世のイメージについても、ニュージーランドでは7割弱が「やすらぎ(平和)」を選択しているのに対して、日本では4割強であり、死への恐怖や死のイメージの2国間の差は関連していると考えられる。ただ、「やすらぎ(平和)」と「無」は2国とも高い割合を示し、共通する心理面も部分的にはあるのかもしれない。

しかし、死後に対する認識では、「あの世」の存在に対して、ニュージーランドの高齢者の5割以上が否定的なのに対して、日本では7割以上が肯定的な回答をしており、2国間に有意な差が認められた。さらに、「霊魂が残る」ことに肯定的な回答をした割合は、ニュージーランドが6割、日本で5割であった。この両者を見れば同様の結果としてとらえやすいが、キリスト教での霊魂は、天国と呼ばれる神のもとと地獄に存在するというのが一般的な思想であり⁴⁾、わが国の仏教による「輪廻」というあの世に霊魂が存在とは異なる意味であると推測される。

一般的に、ニュージーランドではキリスト教が多く、日本では仏教等の宗教信仰が多いと考えられている。しかし、2013年のニュージーランド国勢調査によると、キリスト教が約47%(内、カトリック教会12.6%、聖公会11.8%、長老派教会8.5%、その他15.1%)、その他の宗教が6.0%、無宗教が41.9%、無回答が4.4%だった⁵⁾。ニュージーランドでは、現地民族との共生をめぐる歴史的背景のため、キリスト教が主な宗教であるが、西洋諸国とは異なるとされる⁵⁾。

一方、日本の宗教信仰は、年代によって宗教的思想が異なる上、わが国の独特なものがあるとされる⁶⁾。堀江⁶⁾によると日本人の宗教思想として、「宗教

は大切」と「靈魂が残る」ことを特徴と主張している。これは、儀礼的宗教性とスピリチャリズム的死生観と関連し、思想は「①宗教は信じるが死後生は信じない」、「②宗教も死後生も信じる」、「③宗教は信じないが死後生は信じる」、「④宗教も死後生も信じない」に大別されるとしている⁶⁾。この分類では、③と④が約4割で②は1割強としている⁶⁾。日本は仏教国とは言え、葬式仏教といわれているように、日頃は宗教的な関わりが低い。これに反して規模は異なるが多くの日本人が同じような形式で葬式を実施する風習は、武士道から引き継がれている日本的規範である世間体を気にする日本人の心情かもしれない⁷⁾。実際、本調査結果でも、ニュージーランドの高齢者は先祖の墓に入ることに否定的な回答が6割、それに対して日本では9割弱の高齢者が先祖等の墓に入ることを考え、5割以上が墓を守ることが子孫の義務だとしている結果を得た。このことは、わが国の宗教信仰が儀礼的宗教性であることを支持している。日本での先祖伝来受け継ぐという儒教的な考えが内在していると考えられる。

しかしながら、ニュージーランドで信仰されているキリスト教の死とは、宗派で異なるが、共通事項として、肉体を離れ神のもとに召されるという考え方が通常である⁴⁾。つまり、キリスト教による死は、家族や祖先ではなく個々の現象として捉えられているため、共通の墓という考えが少ないと推測される。だが、ニュージーランドにも2割強が先祖の墓に入ると回答していることは、わが国に近似した死生観が内在しているのかもしれない。

以上のことから、ニュージーランドとわが国の宗教派や死や死後に対する認識の差異は必然かもしれない。しかし、宗教派よりも社会的および歴史的背景で個々の価値観や思想が培われていると考える方が妥当かもしれない。1989年スウェーデンの社会学者 R.トルンスタムが提唱した「老年的超越」⁸⁾であるかもしれない。老年的超越とは、超高齢になって至るとされる主観的幸福感。老化に伴う各種能力の衰えを否定的に捉えず、現状を肯定し、多幸感すら抱くという心理的適応を指す⁸⁾。この元になるのは、エリクソンの理論であり、「英知」はエリクソン⁹⁾の発達課題である適応をもたらし力とし「統合」にその見識が示されたと提唱されている。この境地は同時に、安らぎを得て死の恐怖が消滅する心境に至ることを意味するのかもしれない。面談の中で、日本人高齢者は「あの世は安らぎ」であり「あの世で

は友達をいっぱい作りたい」と語り、ニュージーランド高齢者が「あの世があると思うと気が楽になる」と穏やかな表情で語っていた。「誰もが死後の世界から帰った人がいないことは、とてもよい処だからじゃない？だから死ぬのは怖くない」との87歳の日本人高齢者の語りから、生死に関して自身の考えを持つことの重要性を再認識した。

ハイデッガー¹⁰⁾は「おしゃべり」の有用性を述べている。日ごろの何気ない会話において高齢者は自らの心の内を表出していることがある。会話の機会をもつことは、傍らにいる看護者にとって、高齢者の生死への真の想いを把握する機会になる。筆者の先行研究¹¹⁾でもデイサービスでの一番のお楽しみは「おしゃべり」と答えていた。長命で健やかに生きる人から死への態度を聴くことは、安寧な死を迎えるための示唆を得る機会になることを学ぶことができた。柏木¹²⁾は「聴く」には「個人的な関心を持ってしっかりと」のニュアンスが入ると述べており、その機会が多い私たち看護職はケア専門職として常にその心根で高齢者に接する必要性が示された言葉と言えよう。このような高齢者の看護職としてのケアとして重要なことを認識する必要がある。

研究の限界として、今回の調査では多くの課題が残された。対象者が非常に小集団である上、日本の対照群が年齢、性別等対象者とマッチングがなかったため、比較は妥当とは言えない。今後の研究では、大きな集団を対象に、年齢、経済状況等の社会的背景を聴取し、調整した上での分析や縦断的研究が必要である。

VI. 結論

終末期に最も近い高齢者に対し、安寧な死を迎えられるための支援には個々の「生と死に対する態度」を把握することは重要である。そのためには、個人的な関心を持ってしっかりと聞く態度こそが、看護職やケアの専門家として必要である。

本調査結果は、今後の研究の一資料として活用されることを期待したい。

謝 辞

本調査研究には、ご尽力を頂いたハット市のリンダ夫人、リタイアアパートメントハウスの施設長およびスタッフの方々、公益財団法人箕面市国際交流協会 常務理事事務局長 三上照男様に深く感謝を申し上げます。さらに、調査にご協力を頂いた高

齢者の方に心より感謝を申し上げます。

文 献

- 1) 世界保健機関 (WHO) の World Health Statistics 2016(世界保健統計 2016)
https://memorva.jp/ranking/unfpa/who_whs_2016_life_expectancy.php
- 2) 佐藤進：ニュージーランドの福祉行政と高齢者の社会福祉, 海外社会保障情報, 1988, 82, 79.
- 3) 芝田英昭：ニュージーランド社会保障の概要と課題, 立教大学コミュニティ福祉研究所紀要, 2015, 3, 99-119.
- 4) 武藤一雄：キリスト教における死生観., 龍谷哲学論集, 1990, 6, 8-19.
- 5) 石森秀三：ニュージーランド・マオリとキリスト教--民族宗教の衰微とキリスト教の土着化, 人文学報, 1974, 38, 41-61.
- 5) 2013 Census QuickStats about culture and identity - Religious affiliation". Stats NZ - stats.govt.nz. 2014.
<http://archive.stats.govt.nz/Census/2013-census/profile-and-summary-reports/quickstats-culture-identity/religion.aspx?url=/Census/2013-census/profile-and-summary-reports/quickstats-culture-identity/religion.aspx>
- 6) 堀江宗正：日本人の死生観をどうとらえるか—量的研究を踏まえて, 臨床死生学研究会, 2014-04-16. Horie_201404.pdf
- 7) 山本博文：武士道 新渡戸稲造, NHK 出版, 2012, 72-73.
- 8) 増井幸恵：老年的超越, 日老医誌, 2016, 53, 210-14.
- 9) Erikson, E.H., Erikson, J.M., Innocek, H.Q. 著.1986, 朝永正典・朝永梨枝子訳：老年期, みすず書房, 1999, 57-77.
- 10) Heidegger.M, 桑木務訳：存在と時間, 岩波文庫, 1976, 168.
- 11) 杉原トヨ子, 水内美代子：介護老人保健施設利用者の主観的幸福感の分析, インターナショナル Nursing Care Research, 2011, 10, 30.
- 12) 柏木哲夫：生きていく力, いのちのことば社, 2005, 70.